

Ⅲ 期（一般）

受験番号	<input type="text"/>	フリガナ	
	<input type="text"/>	名前	

令和4年度 春入学

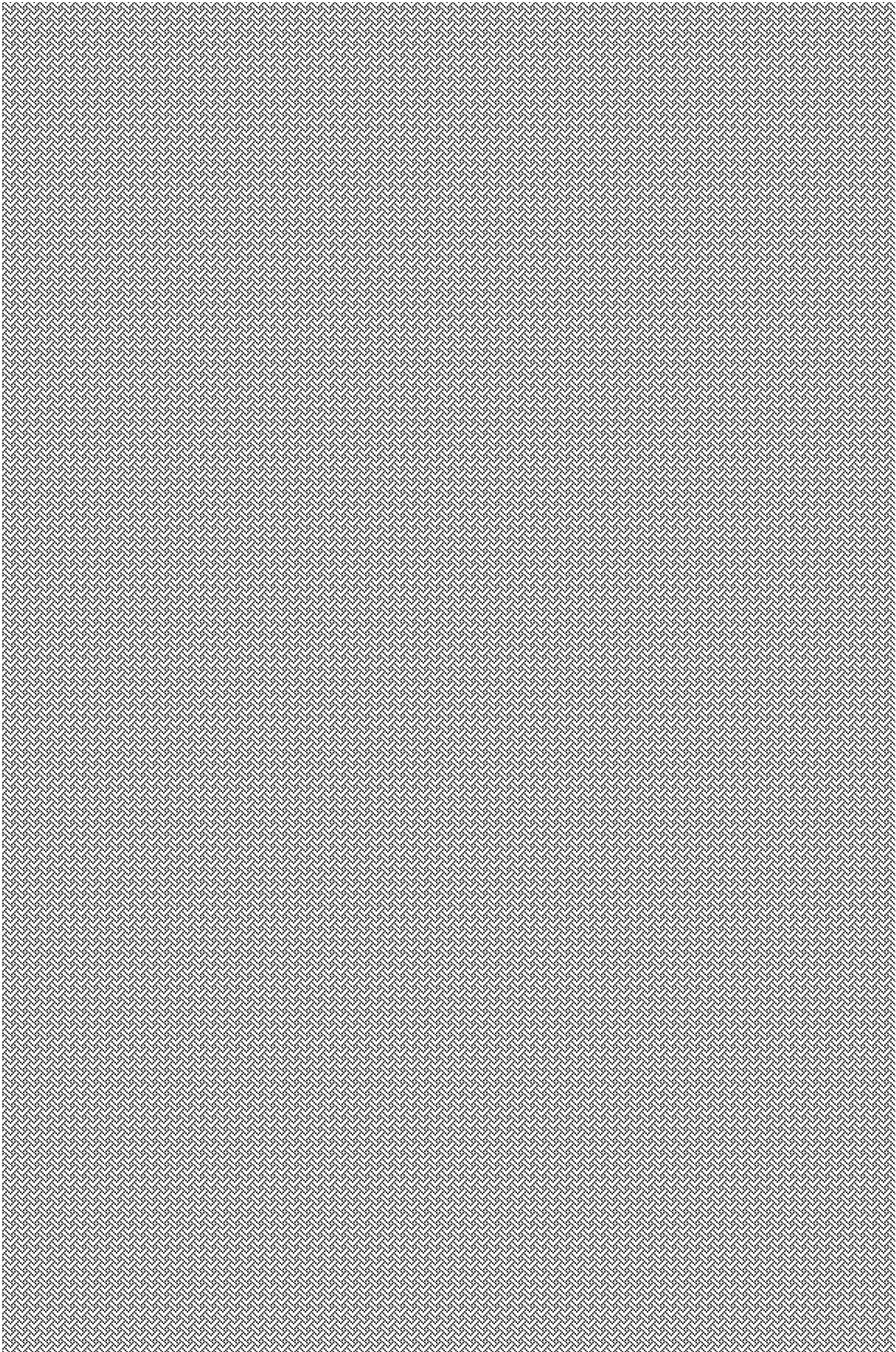
武蔵野大学大学院 言語文化研究科 言語文化専攻 ビジネス日本語コース 入学試験問題

3月6日 実施
<100点・90分>

[小論文および日本語]

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 この問題冊子は全部で8ページ(表紙・余白含む)あります。問題Ⅰ～Ⅲの全ての問いに答えてください。
- 3 試験時間は90分です。途中退室はできません。
- 4 試験中に、問題冊子および解答用紙の印刷不鮮明や汚れなどに気がついた場合は、速やかに手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答には、鉛筆、シャープペンシル、黒または青のボールペン、万年筆を使用してください。
- 6 修正をする場合には、解答用紙を汚さないよう、消しゴム等できれいに修正してください。
- 7 解答は全て解答用紙(B4用紙3枚)に記入してください。
- 8 この問題冊子と解答用紙の両方に、受験番号、名前(フリガナも)を丁寧に書いてください。
- 9 問題冊子の余白等は、メモなどに使用してもかまいません。
- 10 試験終了後、解答用紙(答案)のみ回収します。この問題冊子は持ち帰ってください。



[小論文]

問題Ⅰ 次の質問に対するあなたの考えを自由に書きなさい。

(※ 改行等含め 800 字以内)

あなたが将来働いてみたいと思う日本の企業を1つ取り上げ、その企業の特色や、どのような点に魅力を感じているのかを具体的に書いてください。

また、その企業への就職を考えたとき、あなたは本コースで何をどのように学ぼうとしているかについても、具体的かつ詳細に述べてください。

(※ 日本語での文章の適切さや構成、内容について評価します。)

[日本語]

問題Ⅱ 次の状況のとき、どのような表現で何を伝えたらよいかを考え、実際の日本語でのビジネスメールを想定して書きなさい。

(※ 字数指定なし。ただし解答欄内に収まるように。)

あなたは現在、有明商事株式会社のサポートデスクにてお客様対応をしています。

本日、あなたの会社がインターネットで個人のお客様向けに販売している商品（バッグ）について、取っ手部分が取れてしまう不具合がある旨のメールがありました。

検品は行っていますが構造上の不備も考えられるため、社内担当部署に至急確認する一方で、まずはお客様宛にお詫びのメールをお送りしたいと思います。

この状況をよく理解した上で、適切なビジネスメールの文面を作成してください。

なお、メール文に必要な他の情報は、適宜想定して加筆してください。

[日本語]

問題Ⅲ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。解答はすべて解答用紙に書きなさい。

これまで私たちにとって、通勤圏内に住居を構え、勤めている会社に週に5日出勤し、土日に休みを取るというのが「普通の人生」でした。会社というのは「毎日行くのが当たり前」であり、そもそも「週に何日、会社に行くのか？」という論点は議論の対象にすらなりませんでした。「普通の働き方」「普通の生き方」が極めて狭い範囲の定義に収斂していたのがこれまでの社会です。ここに多様性は全く認められていません。通勤が毎日のことになれば、会社との物理的な距離を縮めて通勤の労苦を少なくしようと思うのは当然のことでしょうし、よほどのこだわりがなければ遠方に住む理由もありません。つまり、このような就業形態が標準となる社会では、①人生における「時空間のオプション」はほぼ会社によって規定されてしまっていたということです。

ところが、この原稿を執筆している2020年8月現在、これまで多くの人が当たり前だと信じて全く疑ってこなかった「毎日、電車に乗って会社まで通勤する」という、人生のおよそ半分の期間を占めていたライフスタイルが過去の遺物となりつつあります。各種の調査によれば、現時点で在宅勤務をしている人のうち、おおよそ7～8割の人は「毎日会社に通勤する」という従来のライフスタイルに戻ることに強い拒否反応を示しています。この先、通勤の頻度がどれくらいのスタンダードで落ち着くかは全くわかりませんが、社員意識調査の世界最大手であるギャラップ社の現時点での調査によると、社員のエンゲージメント（仕事に対する取り組み意欲）が最も高まるのはリモートワークの比率が60～80%の状態だという結果が出ています。これはつまり1～2日はオフィスで働き、残りは自宅あるいは別の場所、いわゆる〔②〕で働くのが最もエンゲージメントが上がる、ということです。もちろん業種によってはこれまで通り、毎日会社や工場に通うことが求められるのだらうとは思いますが、仮にギャラップ社の結論に社会が収斂して週に1～2日程度の通勤がスタンダードになるとすれば、社会に甚大なインパクトをもたらすこととなります。もし「週に1～2日の出勤」が社会的なスタンダードになれば、都市中心部の昼間就業人口は5分の1から5分の2となり、オフィススペースの半分以上が空室となり、都市部の不動産開発は停滞、交通・運輸・飲食等の需要も同様に5分の1から5分の2に縮小することとなります。現在、東京で展開しているレストランや小売店舗の③損益分岐点比率はほとんどが50%以上ですから、このような状況に陥ればほとんどの店が潰れることとなります。一言で言えば、私たちが近代になってずっと抱いてきた「無限に繁栄する都市」というイメージは、歴史上ここで終焉する可能性がある、ということです。

一方でこのような変化は、これから迎える「④ゼロ成長社会」を生きていく人にとってより多くの「生き方の選択肢」を与えてくれることにつながります。週に1～2日といった程度の頻度での通勤であれば、会社と住居の距離や位置関係をあまり気にすることなく、住みたいところに住むことが現実的な選択肢となります。通勤費用をどちらが負担するかという問題もありますが、週に1度であれば、東京の企業に勤める人が大好きな京都に暮らしながら、週に1度は新幹線で通勤することでも十分にありうるでしょうし、鎌倉・逗子・葉山などのビーチリゾートの街、あるいは軽井沢・蓼科・那須などの高原リゾートを居住地にすることも十分に可能でしょう。仮想空間シフトが進むことで、東京で働く人の「居住地の多様性」は開違いなく高まることになるでしょう。

さて、ここまでの指摘はこれまでもそれなりに議論されていることだと思いますが、コロナの影響が「人の多様性」に与える問題はこれだけでは済みません。というのも、東京で発生するような

「職住分離の遠心力」は、また同時に別の都市でも起きることになるからです。具体的には、たとえば札幌・仙台・名古屋・大阪・神戸・福岡などの都市部に働いている人もまた、それら個別の都市部に居住する意味合いが希薄化し、「どこに住んでもいい」ということになります。そうすると、それらの人の中から一定の比率で「東京に住みたい」という人も現れてくるでしょう。たとえば仙台の企業に働きながら東京に住む、札幌の企業で働きながら東京に住むといったかたちです。このような事態が進展することで、私たちの社会では「普通の生き方」という規範＝ノモスが解体されていくことになるでしょう。

リモートワークの常態化によって「職住分離の遠心力」が強まると、「職場の場所」と「住む場所」が完全に分離して選択されることになるでしょう。場合によって「外国の企業に勤めながら東京に住む」という外国人も今後増えてくることになるはずです。すでに報じられているように、米国のフェイスブック社は「永続的なリモートワーク」を社員に認めることを発表しています。このニュースはそれほど大きな反響を呼ばなかったようですが、⑤ほとんどの人はこのような就業形態が広がることのインパクトを理解していないと思います。「永続的なリモートワークを認める」ということは、全世界のどこにいてもフェイスブック社で働ける、ということです。これを逆に言えば、フェイスブック社は、世界中の才能ある人たちすべてに、フェイスブック社で働く機会を開くということなのです。

これまで、労働市場というのは「物理的な場所の制約」によって、市場が分断されていました。福岡の企業は基本的に福岡に住んでいる人から採用し、東京の企業は東京に住んでいる、あるいは少なくとも住むことができる人を採用することが前提になっていました。場所によって、採用のための労働市場が分断されていたわけです。ところがフェイスブック社のように、永続的なリモートワークを認める企業が増えてくると、この「物理的な場所の制約による労働市場の分断」は消滅し、世界中の労働市場の中で最も優秀な人材を採用するという「労働市場のグローバルメガ競争」が発生することになります。

このような変化が起きれば、採用市場における競争のあり方は劇的に変わることになるでしょう。知的生産の才能とスキルと英語力さえあれば、世界中の好きなところに住みながら、もっとも高い報酬ともっとも高いやりがいを与えてくれる企業に勤めることができる時代がやってくるのです。これまで、ある都市に居住する理由の大半は、「その都市に仕事があるから」というものでした。しかし、都市を選択する理由から「職場の場所」という制約条件が解除されてしまえばどうなるでしょうか？ その時、はじめて⑥「都市そのものの魅力」が問われることになります。社会学者のリチャード・フロリダがかつて指摘したように、寛容で、多様性を許容し、さまざまな価値観やスタイルを相互に認め合い、柔和で健全で豊かに生きることができる都市には、さまざまな国から人が集まることになるでしょう。そして、そのような生き方を許容しない閉鎖的で不寛容な都市からは、続々と才能ある人々が出ていき、そこに残るのは「自由に働く場所を選べない人たち」だけということになるでしょう。これから先、東京がどちらになるかは、私たち自身がこの変化を機会として考えたとき、東京という都市をどのような場所にしたいと考えているか、という「主体的意志」にかかっているということです。

(山口周「東京の多様性の現状」滝久雄編著『東京の多様性』日本経済新聞出版による)

問1 ①「人生における『時空間のオプション』はほぼ会社によって規定されてしまっていた」とはどのようなことか、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 会社員が都市部の会社に通勤する際にいかにその距離的な労苦を軽減するかは、その人自身の努力に委ねられていたということ
- 2 これまでは、社員が毎日会社で働くことが当たり前のことと考えられていたため、会社で過ごす時間が人生で重要であったということ
- 3 その人がどこに住むかは、本人の意思よりもむしろ会社がどこにあるかという物理的な条件によって決められてしまっていたということ
- 4 会社員たちの人生はそのほとんどが通勤に費やされていたが、それが時間の無駄遣いであることを会社は認めたがらなかったということ

問2 [②] に入ることばとして、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 セカンドプレイス
- 2 サードプレイス
- 3 セカンドライフ
- 4 サードライフ

問3 ③「損益分岐点比率」についての説明として、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 一般的に損益分岐点比率の割合は低い方がよく、売上高の減少に対する赤字への耐性が強い。
- 2 財務分析の収益性の指標となる損益分岐点比率は、実際の売上高に対する固定費の割合を示す。
- 3 損益分岐点比率は、一般的には80%を上回っていれば優良な状態であると判断される。
- 4 損益がちょうど50%になるような売上高のことを、損益分岐点売上高と規定する。

問4 ④「ゼロ成長社会」についての説明として、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 高度経済成長期を経て一定の経済力を有し、経済成長率の無変化が常態化している社会
- 2 生産・消費・輸出入・人口などの規模が前年度と変わらないか、減少・縮小傾向にある社会
- 3 経済活動に絡む生産・消費などの動向が固定化し、バランスを保っている状態にある社会
- 4 経済成長率や人口増加率を加速させる要因がなくなり、景気が長期間頭打ちになった社会

問5 ⑤「ほとんどの人はこのような就業形態が広がることのインパクトを理解していない」と思われるのはなぜか、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 「永続的なりモートワーク」はフェイスブック社のような大手企業だからこそできる特別な就業形態であり、中小企業が大半を占める日本においては実際にはあり得ない就業形態だから

- 2 「永続的なリモートワーク」が可能になれば有能な人材が世界各国から有力企業に集中するなど今まで想像もしなかった競争が起こり得るが、まだ一般的な認識には至っていないから
- 3 一般的な会社員にとっては物理的な距離にとらわれたまま会社で働くことが普通であるため、「永続的なリモートワーク」という概念自体が仕事として実現するとは認識されていないから
- 4 リモートワークはコロナ禍による一時的なものであり、この状況が収まればまた従来と同じような雇用や就業の形態に戻るだろうと誰もが期待しているのが現実であるから

問6 ⑥『『都市そのものの魅力』が問われる』のはなぜか、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 都市がどこも似通ったものになると、どこの都市で仕事をするかはさほど重要な意味を持たなくなってしまうから
- 2 都市は仕事があることで成り立っているため、仕事なくなった都市はもはや都市としては機能しなくなってしまうから
- 3 仕事が都市居住の理由でなくなると、住みたいだけの魅力がなければ都市は居住先として選ばれなくなる可能性があるから
- 4 柔和で健全で豊かに生きることができる都市であるためには、職住が近接していることが条件のひとつであるから

問7 この文章の内容についての記述として、最も適当なものを1～4よりひとつ選びなさい。

- 1 毎日会社に通勤することが当たり前だった時代は終焉を迎え、もはや誰もがリモートワークをライフスタイルとして受け入れている。
- 2 職住が未分離の従来のライフスタイルはリモートワークにより大きく変化したが、それは新たな労働市場の競争を生む可能性もある。
- 3 どこに住んでいても仕事ができるという可能性は一方で働く場所を奪い合うことにもなるため、経済的な貧富の格差が拡大する。
- 4 魅力的な地方都市は新たなライフスタイルとして選択される可能性を秘めているため、今後首都機能を分散することが肝要である。

問8 本文の内容を、なるべく文中のことばを使って 300 字程度に要約しなさい。(※ 「である」体)

【以下余白】

※ メモに使用してもかまいません。

Ⅲ期（一般）

受験番号	<div style="border: 1px dashed black; width: 100%; height: 100%; display: flex; justify-content: center; align-items: center;"> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> </div>	フリガナ	
	I	名	
	<div style="border: 1px dashed black; width: 100%; height: 100%; display: flex; justify-content: center; align-items: center;"> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px dashed black; width: 20px; height: 20px;"></div> </div>	前	

令和4年度 春入学

武蔵野大学大学院 言語文化研究科 言語文化専攻 ビジネス日本語コース 入学試験解答用紙

【小論文および日本語】

評 点

問題Ⅰ 解答は以下のマスに従って書きなさい。

横書き →

100

200

300

400

																				500
																				600
																				700
																				800

問題Ⅱ 解答は以下の の中に書きなさい。

件名: _____

本文:

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

問題Ⅲ 解答は以下の 、およびマスの中に書きなさい。

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

横書き 

																				100
																				200
																				300